

(7) 生物遺体調査

A-9を中心とした掘り出し調査時に採取した旧土壌内に残存する葉片等の生物遺体についての調査結果を報告する。なお、本調査は、本格的な分析調査に先立ち、その可能性や有効な調査手法の確認を主目的に行った予備調査的な調査である。したがって、本格的な調査は次年度以降に行う予定であり、本項で報告するのはそのごく一部であることをあらかじめお断りしておく。なお、花粉や珪藻などの微化石生物遺体と昆虫類については、他の項で取り扱っており、本項で取り扱うのはこれら以外の生物遺体とする。

1. 調査結果

採取した土壌を、0.5mmのふるいにかけて水洗し、残った生物遺体について同定可能なものについて分析した。また、粘性土中に残存する生物遺体調査で一般的に行われる土塊の割り出しによる抽出法も一部試行してみた。

この結果、当該土壌中にはかなり良好な状態で葉片などが残存しており、それらの分析から種の同定が可能であることが明らかとなった。また、土塊の割り出しによる抽出法については、当該土壌が砂質物質を中心としたものであり、水洗により容易に抽出できることから、この手法はかえって葉片を分断してしまうおそれがあり当該土壌の調査にはなじまないことなどがわかった。

水洗により抽出した葉片の一部について、同定作業を試みた。同定作業は、現世の植物標本との比較作業を中心に行い、特に鋸歯、葉脈、葉柄、葉身先端部及び基部等の形状に注目して行った。この結果、スギ、ウラジロガシ、スダジイ？、シロダモ、ヤブニッケイ、モチノキ、カゴノキ？、トチノキなどの葉片を確認することができた。なお、本調査では土壌中に残存する葉片のうちどの種が多いかについての定量的な調査は行っておらず、その明確な比率はつかんでいないが、洗い出した葉片の中ではスギとウラジロガシが特に多く確認された。なお、土壌中から数個の種実も検出したが、現在のところ種の確認までには至っていない。

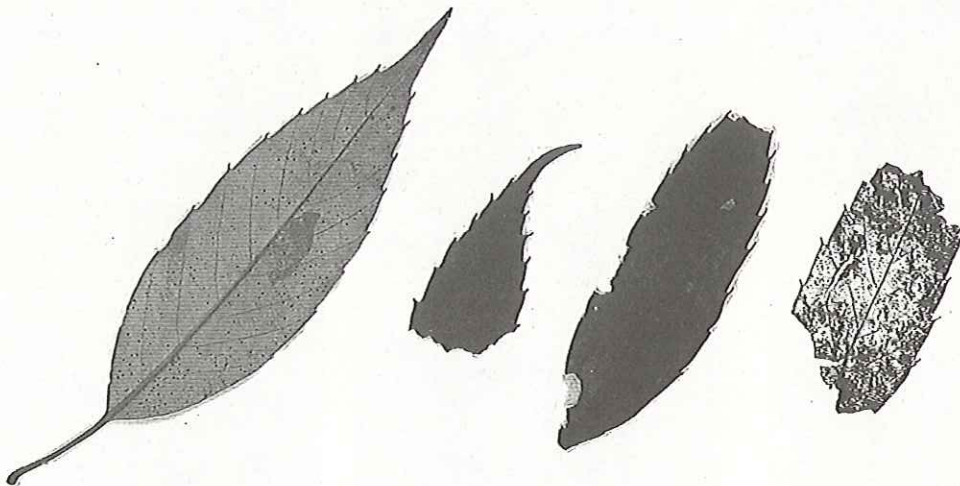


図4.1.7-1 古土壌から出土した葉片（右3枚）と現生の葉

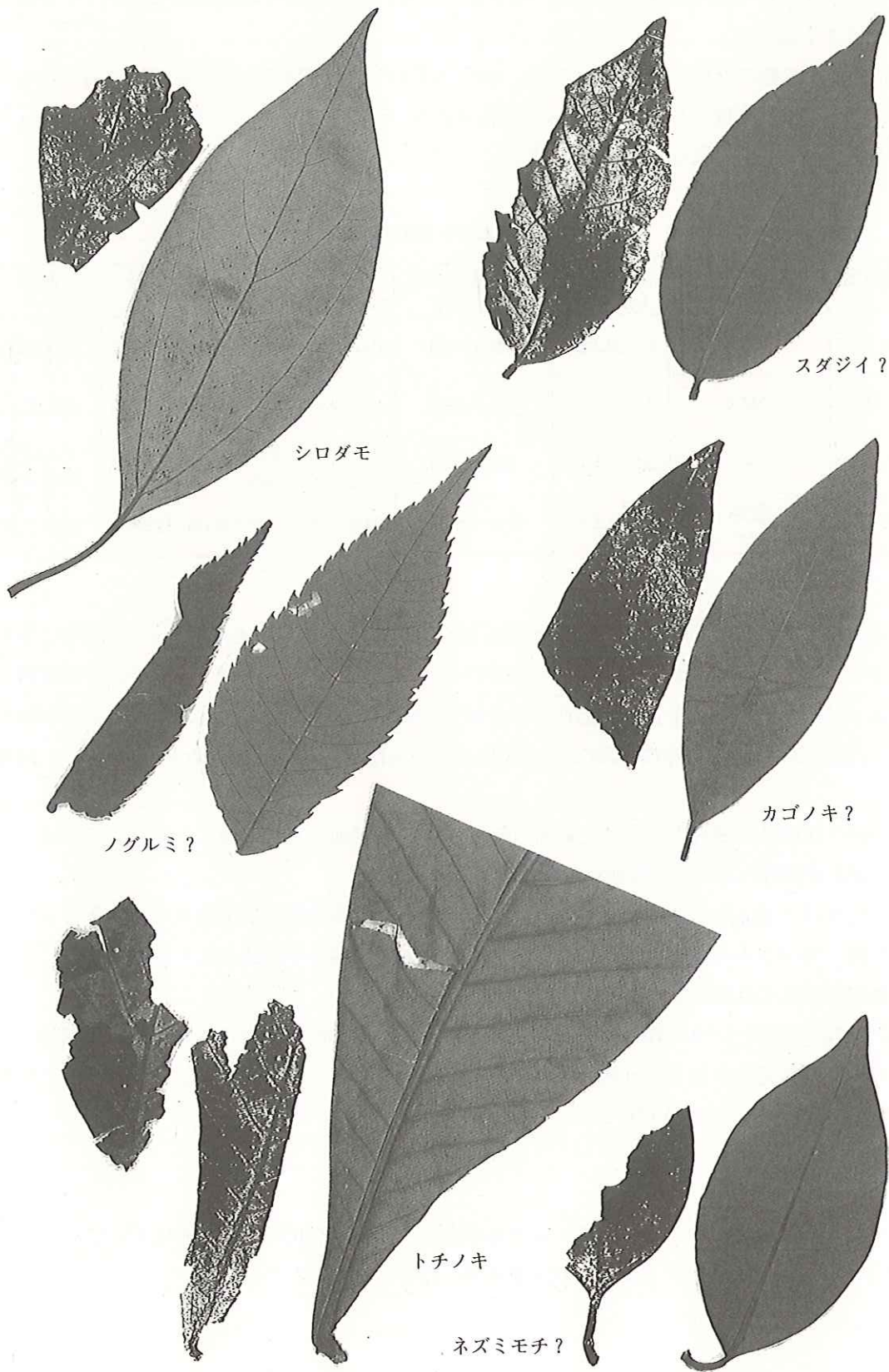


図4.1.7-2 古土壌から出土した葉片（各左側）と現生の葉